

一 如にょじゅう從け飢こく国らい來ぜん 忽こつ遇く大王膳ぜんの事

仰せに云はく、此の文は中根の四大声聞法華に來たる事、譬へばうへたる国より來たりて、大王のそなへに値あふが如くの歡喜なりと云へり。然れば此の文の如くならば法華已前けの人は餓鬼界こくらいの衆生なり。既に飢國來けと説けり。大王膳だいごみとは醍醐味なり。中根の聲聞法華に來たりて一乘醍醐たちまの法味を得て、忽こつちに法王にの位にに備はりたり。忽こつの字には爾前にぜんの迂迴道うえどうの機をに対して忽こつと云ふなり。速疾頓成そくしつとんじょうの義をを忽こつと云ふなり。仮令たとえば外用げゆうの八相をを唱なふる事は所化ををして仏道まいに進まらしめんが為をなり。所詮を末法をに入りては謗法をの人々はは餓鬼界をの衆生なり。此の經に値あひ奉をり、南無妙法蓮華經をに値あひ奉をる事は併しかしながら大王膳をたり。忽遇こつの遇の字を肝要をなり。釈にに云はく「成仏をの難きには非ず、此の經に値あふをかたしとす」と云へり。不輕品をには「復遇ぶくじょう常不輕ふきょう」と説けり。蔽王品をには「生ごんのう値しょうち仏法を」と説けり。大王膳をに値あひたり。最も以て南無妙法蓮華經をを信受をし奉をるべきなり。此の經文の如くならば、法華經より外をの一切衆生をは、何にに高貴いかの人なりとも餓鬼道をの衆生なり。十羅刹女をは餓鬼界をの羅刹らせつなれ共ども、法華經をを受持をし奉をる故に、餓鬼をに即をする一念三千なり。法華へ來たらずんば何れも餓鬼飢饉いずの苦きしみなるべし。所詮を必ず中根の聲聞領解をの言に、我が身をを餓鬼にに類をする事は、餓鬼はは法界にに食じきありと云へども、食をする事をを得をざるなり。諸法實相をの一つ味の醍醐をの妙法を有あれ共ども、終にに開覺あに能あはざる間を、四十余年食をにうへたり。一義をに云はく、序品・方便をより諸法實相かんろの甘露を顯をはれて、南無妙法蓮華經を有あれ共ども、広略二重をの譬説段をまで悟をらざれば、餓鬼のの満々をと有ある食を事をくらはざるが如し。所詮を日本国をの一切衆生をは餓鬼界をの衆生なり。大王膳いとは所謂いわゆる南無妙法蓮華經を是なりなり。遇の字には人法をを納をめたり。仍につて末にに如飢須教食にょけしゅきょうじきと云へり。うへたれ共ども、大王の教をを待をちて醍醐をを食をするが如しと云へり。今南無妙法蓮華經を有あれ共ども、今身よりより佛身にに至をるまでの受持をを受けをずんば、成仏はは有あるべからざるなり。教とはは爾前無得道を、法華成仏のの事なりなり。此の教をを受けをずして法華經どくじゆを讀誦をすとも、大王の位ににのぼる事を有あるべからざるなり。醍醐は題目の五字なり云云。